

戦中戦後一正義とは何ぞや

● 椎名 啓一

1 昭和16年、太平洋戦争が始まったころ

僕は戦争の被害を受けたというか、身体的に傷害を受けたとか、戦争に行ったとか、そういうことはないんですけど、東京空襲は最初から最後まで経験しているのと、それから例の3月の東京大空襲ですね。それだけではなく、もうその前後にというか、その前に相当空襲でやられているんです。その第1回るときから僕はいましたから、それで爆撃というのは恐ろしいなあという感じは持っていたんです。

昭和16年4月に、東京都立第三商業という学校に入りました。父親が商人ですから、大学まで行くような予定はなく、商業学校を卒業したら店を継ぐというようなことで商業に入ったんですが、当時三商には下町の秀才が割合多く入ってきており、しつても厳しく、僕の一生の中では大学よりも都立第三商業の時代に鍛えられたと思っています。

入学した年に太平洋戦争が始まり、服装も我々のときからカーキ色一色となり、電車を通うときも、2駅ぐらい手前から降りて整列させられ、上級生の指揮で学校まで歩くというような、今の時代とは違った教育がされたわけです。

商業学校の3年までは、普通の教育で、軍事教育としての教練はありました。ところが、そのころはご存知の通り予科練の募集が盛んになってきて、中学3年ぐらいから予科練に行く人が目立ってきたんです。都立第三商業の場合も受験者が多いものですから新聞に出たり、また、当時の校長以下の先生が、予科練に行くように勧めることがありました。

その勧め方も僕はちよつと気になつたんですが、教室で先生が一人一人の生徒に、君は何になるんだと聞くんですよ。そうすると、戦争中だけに、商人になりますとか、サラリーマンで一生過ごしますと言えないんです。雰囲気だね。そういうときに、先生の方から予科練を受験したらどうかねなんて言われると、

困ってしまうんです。

僕は商人になるとも言わなかったと思いますけど、家督を継ぐ長男でしたから、それを理由に予科練には受験しませんでした。

ある本にも書いてある通り、当時戦争中でも日本の場合には、長男というが跡継ぎというのは大事にしたんです。特攻隊志願の場合も、跡継ぎがなくなるときは、特攻隊員には決めなかったのではないかと聞いたことがあります。

当時、友達が、中学3年を終えて予科練に行く者も多く、予科練に行った連中はまた予科練の方から派遣されるんですが、7つボタンのような格好のいい服装で学校を訪問し、全校生徒の前で、いかに予科練というのが頼もしいというか、男らしいというか、そういうことを宣伝するわけです。

2 学徒動員と戦争中の傷

そうこうしているうちに4年のとき(昭和18年4月)から戦局がきびしくなり学徒動員ということで、ご存知のとおり軍需工場へ行かされることになるわけです。授業の方は、最初のうち1カ月に1回ぐらいは学校に集まりはしていましたが、それも中止され、毎日、江東区砂町にあった日本曹達株式会社に通い、そのうち1週間交代で夜勤も始まりました。その会社は高射砲の弾を作っていたんですが、弾を作るって簡単なものじゃなく、一発ずつ太い輪っばを切断したりして流れ作業で作っていくのです。これは海軍の十二糎砲弾といつて割合遠くまで飛ぶ弾なんです。その当時使っていた高射砲の弾では、1万メートル上空を飛んでくるB29には届かず、僕達の作っている弾なら届くということではハッパをかけられた記憶があります。

そこに配属されて、1年近くたつてから、1週間交代で夜勤もさせられたわけです。当時まだ中学4年生ですから、今で言えば高校1年生です。そういうことで工場へ行って、鉄を削るバイトという刃物を削るところから始まって、鉄の輪っばを旋盤にか

けて、周りを粗削りするわけです。そのときに、バイトがよく切れるならせん状にきれいに切れていくんですけど、これがちよつと切れなくなると、パチパチ、パチパチと小さな鉄片になって火の粉みたいになり飛び散るのです。そのときに、僕がちよつと油断したのだから、小さな高熱の鉄片が右眼の上に刺さり、火傷してしまい、その傷跡が今でも醜く残っています。

3 空襲

次に空襲の話ですが、当時、人道的じゃないというか、ご存知のように無差別爆撃が毎日のように行っていました。東京は日本の首都として狙われたわけですが、僕は、空襲警報のサイレンの音を毎日嫌な思いで聞いていました。もちろん工場で爆撃にあいたくなっている人もいましたから、3月10日の前からその恐さはわかっていました。

話がちよつと飛びますけど、人間というのは面白いもので、僕の思い出としてはB29が1機入ってきたときが一番怖かったのです。これがそのうち40機、80機とかになるのですが、120機入ってきたとき、そう恐くなくなつたというのが実情です。1機入ってきたときは、その都度、自宅に造つた防空壕に入っていたのが、空襲に慣れてくると防空壕に入らなくなつて、外に出て、きれいな飛行機雲を描いていくB29を見るようになってたんですよ。1万メートル上空をきれいな飛行機雲を引いて行くのをなんの恐怖心もなく眺められる余裕ができてしまうんですから、慣れというのは恐ろしいものです。

4 東京大空襲

3月10日の前にも、何人か同級生が焼夷弾の直撃で死んでいます。そのうち3月10日を迎えることになるんです。

3月9日から10日にかけての大空襲のときは、ものすごく風の強い日で、僕はその当時、今のスカイツーの下、昔でいうと向島区寺島町というところに住んでいたのです。その辺は、奇跡的に焼け残ったんですが、右と左と風下は火の海でした。寺島4丁目とか、牛島神社付近は風上でしたが、焼夷弾が落ちなかったものですから助かったんです。

5 大空襲の翌日

囲りを火にかこまれ、明方まで何もすることなく、家の外で過ごしましたが、明るくなり、火が消えてから、私は友達のことか心配で、自転車に乗り、深川とかそういう焼けたところを見て回つたので。そのとき、遠くへ逃げた人がそろそろ歩いて戻ってくるのに出会いましたが、今思うと、僕だけ自転車ですくい追い抜いて行つたのは申しわけなかつたと思つています。このとき、人間のあさましい姿を見たので話しておきますが、私が自転車で、押上駅近くに停つたとき、焼けて鉄骨だけになった電車の片側で、一人の老人が何か黒いかたまりの上を金槌のようなもので叩いたりしているの、何をしているのかと思つて近づいてみたところ、その黒いかたまりは、何人もの焼死体で、その老人は、死体から金歯を外しているのです。

6 終戦を迎えて

3月10日が過ぎて、その後、下町には大空襲もなかったのです。そのまま、昭和20年8月15日の終戦を迎えたのです。

結論的に言うと、戦争そのものは、本当に憎らしいし、永久にやめるべきだと思っています。無差別爆撃で非戦闘員があいふうに殺されていくというのは本当に悲惨なことです。ただ僕個人として、あるいは僕の人生においては、あの戦争があつたから戦後勉強して今の僕があるんです。というのは、戦争は悪でしようけれども、日本は正義のために戦っていると教育されたわけです。日本は神の国だし、正義のために戦っている。そういうことで僕は戦争の苦しさについてきたわけですが、戦争が終わつてみたら、これまでの日本は悪だと。不正義を行っていたんだと。これが僕としては痛かつたです。ちよつと17歳か、18歳になる直前でしょう。これまでの戦いが不正義だといふなら、それなら、正義とは何ぞやということが若い僕の頭に浮んできたのです。

本来は大学へ行くような家庭ではないし、当時商業学校を卒業すればすぐ仕事に就けたわけですが。ちよつと話がそれますが、戦争中、昭和20年の3月のくり上げで卒業したものの、すべ一人前に働けるようになつ

戦争が終わったときに、正義とは何ぞや、それを追求するのは何だといったら法律だということで、それまでの商学部希望を変えて法学部に進んだのです。当時、僕はアルバイトとして、新制中学の時間講師で週2日働いていましたから、いつやめてもおかしなかつたのですが、短い期間でも法律を学んでおけば役立つはずと考え、法学部に進んだのです。

これはちょっと戦争には関係ないんですが、今話したように、正義とは何ぞやということを探究したいと思って法学部へ進んだので、当時、尾高さんとい

のじゃない。非受験組で少し勉強して、あと2〜3年経ったら試験を受けてみなさいよ」と言われて非受験組に入れられてしまったんです。そうすると、民法相統一科目を仕上げるのに何週間もかかることになり、昭和24年の8月に合格する見込みが断たれてしまうので、鈴木先生と2人で研究室には頼らず、机を並べて図書館で勉強して、昭和24年の8月の筆記試験に受かり、12月の口述にも受かったのです。研究室の方では予科出身者2人が、21歳(推名)と20歳(鈴木)で受かったのは、明治大学では珍しいと(笑)。ぜひ指導員で来てくれとか言われて、研究室に戻りました。

8 進路の選択

ちょっと話はそれましたが、そういうことで基本的には戦争中嫌な思いをしたんですが、正義とは何ぞやということから僕を法律家の方に向けてくれたわけです。しかし、僕は何になるという目標を持って受験したものでなく試験に受かって司法修習生を終えるとき、一番苦しかったのは検事、判事、弁護士の中で何になるかと決めるとき苦悩しました。僕は鈴木先生みたいに弁護士になろうとか何になろうと思って試験を受けたわけじゃないでしょう。だから、あの3つの道のひとつを選ぶとき苦しんだというか、迷ったですね。だけど、修習を終えるときには、まだ24歳の若さでしたから、すぐ弁護士になるよりということから、任官することになりました。下町育ちで役人には向いてないんですが、父親の方も、お前、判事か検事になって悪いやつを懲らしめろと言うので、検事になったのが昭和28年です。その後29年間勤めてから辞めて、今年で弁護士31年ですが、経ってしまったわけです。今、85歳ですが、孫が8人、ひ孫が2人いるんですよ(笑)。だからもう、人生も仕事もほとんど峠を越えちゃっているようなものなんです。

9 鈴木先生との縁

(食の恩人と言われて)

戦争中から1日2合5勺ですか。配給米制度がありました。戦後、食券制度と言うのがあって、お米の代わりに食券というのがもらえたのです。もちろん、自由に手に入らないんですが、僕は、食券を親の方

からもらって駿河台へ来て食事を食べることにしていたのですけど、その当時から胃がよくなかったんです。だから、ご飯を食べると胃がもたれ、午後3時ごろになると胃が重くて勉強どころじゃないんですね。そこで、昼食はコッペパン1個で済ますようにしていました。鈴木先生は当時から食欲旺盛で、食前、食後にご飯を食べたいぐらいに胃腸の丈夫な人なので、私の食券を鈴木先生にあげていたのです。それを鈴木先生が「椎名に命を救われた」と大げさに話しているのです。受験勉強中は、毎朝8時半ごろから図書館に座って、12時にパンを食べて、水を飲みに行き、トイレ

「椎名に命を救われた」と大げさに語っているのです。

受験勉強中は、毎朝8時半ごろから図書館に座って、12時にパンを食べて、水を飲みに行き、トイレに寄ってから図書館に戻り、夜の8時半まで座りつきで勉強をしたわけです。皆さんそうでしょうか。司法試験というのは、頭だけでなく、体も鍛えられるんですね。だから僕はよく後輩に言っていたんです。司法試験というのは決して頭だけがテストされるんじゃない、意思も体がテストされるんだと。

鈴木先生とはそういう縁があつて、僕が弁護士になつてからもずっと彼のところにいるんですが、弁護士で31年間一緒にいるというのも珍しいんじゃないですかね。

僕は、親から学費は出してもらったんですが、それ

以外はアルバイトで稼ぎました。最初は石炭運びから、材木運びまで、いろいろやりました。あのころ、金町駅の白井組という組に入って働いてみましたが、石炭を一回運び込むと10円だったかな。今覚えてないけど、そういうことで夏休みを利用してのアルバイトです。また、当時、板橋に軍隊の被服関係を扱う工場があったんですが、終戦後フリップに賠償物資として送るため、1回も使わなかった六尺旋盤を梱包するアルバイトをしたんです。そのとき、僕は腹の中でね、俺たちボロの旋盤で高射砲の弾を作らされていたが、この旋盤を使わせてくれればよかったのにとくやししい思いをしたのを覚えています。

このように、昭和21年と昭和22年の夏休みは力仕事をやっていくのです。ところが、さっきの正義心の話ではないですけど、次第に目覚めてきて、俺は学生としてこんなアルバイトをしていいんだらうかと。そのとき、新制中学という今の中学制度ができたのです

が、教員が足りなくなつて大學生がたくさんアルバイトとして募集されたわけです。それで僕は英語と社会科学の先生として、週2日行つて月に700円もらえました。それと同時に、当時すごいことは、兼子一さんの戦前の民事訴訟法の本が600円もしました。刑罰だけは昭和24年1月1日から施行になつたわけで、僕らは、新刑訴の第1期生というか、最初の試験に受かつたのです。

ら帰宅し、自ら一人で合格祝をしました。

僕は司法試験の合格発表の夜、夢かと思って驚きましたが、お祝いする金もなく、その夜帰り道、なけなしの金を払って柏駅前でリンゴを買ってかじりながら帰宅し、自ら一人で合格祝をしました。

焼夷弾は、屋根瓦は突き破らないと思いますが、何発かがバタバタに落ちてきて油を流し出して燃えるのです。ちやちな屋根は突き破つてしまいますが、慣れてきたら布団のようなものをすくかぶせれば何でもいんです。それを放置して逃げると油がばーっと散つて燃え上るわけです。

3月10日の前の空襲のときでしたが、ちゃん空襲壕に10人ぐらいて入っていたとき壕内で友達と「アメリカ軍は銃子に上陸するらしいが、我々は竹槍で戦わないといけない。奴らはずるいから」と話合っている、爆弾の落ちる音がしたかと思うと、僕のすぐ後方でアスツと音がしたので振り向くと、そこに光ったものが見えたんです。僕は一瞬爆弾だと思って、生れて初めて、死んだと思いますが、結果的には焼夷弾だったので。そのとき、その油がジュツと吹き出したのです。反対方向の出口から逃げようと思って外に出ようとしたのですが、出口の前にも一発落ちていて、そこから人が出ないんです。僕は、爆弾じゃないことは分かったんですけど、ジュツと油が出るし、前にいたおっさんの頭をぶん殴って（笑）。それで出たんです。外に出たら、次々に落ちてくるので、僕はすぐ服衣場に入ったのですが、大人の人が、「その学生、2階に焼夷弾が落ちている。すぐ消しに行け」と命令したので、火事場の馬鹿力というのか、1階にあった水の樽を抱えて2階にあがると、床の上で一発の弾が落ちていました。それで、こいつと思って水をまこうと

き、そこから焼夷弾が下へ落ちてしまった(笑)。それで、また外へ出たら、不発弾が一発落ちていたので、こいつと思って拾ってきて、防火用水のところで話合っていた友人に見せたところ、友人が、「おいお前、火が出たらどうするんだ」と(笑)。すぐ捨てろと言うから、防火用水の中に入れましたけど。何というか、その場に慣れて落ち着いて行動すれば、何とか命というのは助かるんだなと思いました。

12 東京大空襲(再び)

3月10日までに何回ぐらい空襲があったのかは覚えていませんが、回数は多かったです。最初に1機入って来たのは、昭和19年の11月末からじゃないですか。僕の記憶では、昭和19年の11月二十何日、新嘗祭かの日、僕はたまたま友達と筑波山に登ったんですが、帰りの汽車の中で、東京に空襲があったと聞かされ、乗っていた大人から「家は焼かれてないかもしれない」とおどかされました。しかし、実際はなんともなく安心したのを覚えています。

その後、徐々に、1機で何回か来たんですが、あとではもう増える一方でしたね。一番多いときは、もう80機ぐらいは優に入ってきているんじゃないですか。初めのうちは、日本の戦闘機が何機か飛び出し、迎え撃っていましたが、そのうち、それもなくなり、B29は悠々と爆撃して帰るようになり、最初は昼間だけでしたが、昭和20年に入ってからでしょう、夜も来るようになりました。

3月の後の空襲は、B29の目標も蒲田の方とか、違うところに移り、下町の一角だけが残っただけでした。今でも牛島神社ってあるでしょう。あそこの一 corner は川に面して助かっているんですよ。言問橋や吾妻橋は火の海になって死者が沢山出たのですが、ご存知の通り、関東大震災のとき、このときも市民が衣類、家財道具など沢山のものを持って橋の上に避難したため、それらに火が移り沢山の焼死者が出たのです。悲劇をまた繰り返してしまっただけです。

僕はさっき言ったように自転車車で深川の方を見て回ったのですが、小さな橋でもそれがあるわけです。

13 玉音放送

大学に入ってから動員先が変わり、京王線分倍河原にあった高射砲を造る会社に残されたんです。ところが昭和20年4月入学する予定だったのが遅れ、7月までは三商時代の工場に残され、動員先で入学式をやったわけです。

初めは、何をやったかという、まず自分たちの入る防空壕を掘っていました。そのうち広島に原爆が落ちたでしょう。そうしたら新型爆弾ということ、肌を見せちゃいけないと言われ、防空頭巾をかぶったまま暑い思いをしながら土を掘って、自分たちの防空壕を作っていたんです。そうしたら終戦になり、8月15日詔勅が出るわけですが、僕らは、天皇陛下からハッパを掛けられるんじゃないかって、想像していたんですね。ところが、内容がよく聞き取れず、よく分からないんです。放送が終って解散するところになって、学校の先生で泣いている人がいるんですよ。なぜ泣いているんだろうと思ういたら、友人達が、日本は負けたらしいと言っただけです。

それで僕は8月16日京王線が停止したままなので、分倍河原から歩いて新宿まで出て、そこから言問橋の牛嶋神社近くにあった親戚の家にまぎりました。

14 終戦直後の状況

食糧事情がすごく悪化し、毎日芋しか食べられない日も続きました。しかし、朝、昼、晩と芋を食べていると、そのうち、お腹は空くけど、芋を食べる気が起きないんです。それで僕は栄養失調で神田駅で倒れそうになったこともあるんです。そういう食糧事情でしたね。それに、ひどいインフルでしょう。インフルの怖さというのは肌身に感じています。

ついでに言うと、うちのおやじは、男1人の子の僕が戦争で失わず助かったでしょう。だから、その僕が法の探求で勉強し出したので、勉強し過ぎて死んだら大変と思って勉強するなというわけですよ。しかし、勉強しなければ合格しません。受験勉強中は柏からお茶の水まで2時間近くかけて大学まで通って勉強しつづけたのです。そのうち、体は痩せてくるし、試験を受けない友達や、「椎名のやつ、だんだん痩せてい

くけど、夏の氷のようにそのうち溶けてなくなっちゃうんじゃないか」というぐらいに痩せてしまいました。

おやじはもう僕の姿を見て、勉強するな、大学をやって働けとか、これからは偉い人がいっぱい出るんだから、お前が勉強して偉くならなくたって日本は大丈夫なんとも言われました。

僕には、子供が3人いるんですけど、子供たちに「このお父さんは、親から勉強するなどは言われたことがあるけど、勉強しろと言われたことはないんだ」と言ったら、「お父さん、それはうそだよ、親で勉強するな」という人はいいよ」と笑っていました(笑)。

15 正義とは何ぞや

感覚的に新憲法というのは新鮮でしたね。僕ら、最初は古い憲法を暗唱するくらいに読み込んでいたんじゃないかな。

新憲法が發布されてからは、前文が素晴らしい文章だと思って、それを暗記していた記憶があります。ただ、戦争放棄というところは、これはプログラムだな、こんなことが現実に見えるわけじゃないんじゃないかと感じていました。やっぱり戦争を経験した者として、また、ローマ時代からの歴史を見ても、戦争、戦争でしょう。第1次世界大戦で、人類はひどい思いをしたのに、それにこりず、再度世界大戦を始め、数々の悲劇を生んだもので、戦争はなくなることはないんじゃないかという気はしていました。現になくなってないですからね。将来は、平和のために努力しなくてはいけないのと、それにあるべき姿からしたら、やっぱり人間が人間を殺すというのは本当に愚かなことですよ。それが回避できないというのは、人間の愚かさでしょうね。

話はそれますが、僕は、受験勉強中に「一尺四方の世界」ということを日記に書いて、自分で自分を刺激したんです。1尺がだいたい30センチでしょう。僕らが図書館で座って教科書と六法全書を置くときそれくらいになるのですが、僕は「これが俺の今の世界だ。この奥に法の窮極にあるものというか、正義があるんだ」と。だから、この一尺四方から目をそらしちゃいけないと自分で自分を励ました。座った以上は顔を上げることも横を向くこともしないで、精神を集中しました。しかし、当時の明大はわりあい女子学生が多く、隣に女の子に座られたときには気分が乱れて、と

てもじゃないけど勉強にならない(笑)。だから、図書館に入ったら大きな机の端に座って隣に女の子が座る率を少なくすくとして勉強しました。

ついでに言うと、僕は小学校のとき、毎年夏休みに日本泳法を習っていて、6年生のとき平泳ぎの選手で、向島区の大会に出て優勝したこともありましたが、ところが終戦後、古橋廣之進という日大の学生が僕と同じ年なんですけど、自由型で世界記録を作った有名になり、昭和24年僕が司法試験を受けるときは、ロサンゼルス全米選手権で400メートル、1,500メートルで優勝しているわけです。僕としては、古橋の出るときだけ席を外し、学生課のラジオを聞きに行きました。そのとき、「俺の今の世界は、なんだ、古橋が世界を股にかけているけど俺は一尺四方の世界かと。しかし、今に見ていろ、俺はこの奥を探究してみせる」とね(笑)。

探究の成果は、あったんでしょうね。だから、21歳で司法試験にも受かったし、その後、正義心を満足させる検事にもなりましたから。

僕が検事になるときは、今とは、国内も国際事情も違い、昭和25年には朝鮮戦争も勃発しているんです。本当に革命になるんじゃないかと思うような時代で、検事になったらすぐギロチンじゃねえかと思うような時代でした。

本当に今の人には想像がつかないと思いますが、その直前に皇居前メーデー事件が発生しています。しかし、当時の僕の腹の中では正義心が燃えていて、正義を実行するには何も共産党とか何とか関係なしに実行できる、正義のためにギロチンに遭ったって構わないと、そういうけげなげな気持ちだったんです。

16 検察官任官

初任地が広島でした。そのとき、心構えとして、二つのことを心に誓いました。一つは、任地に拘泥しない。検事はどこへ行っても検事としての仕事があるはずだ。広島だろうが何だろうが、任地に拘泥しない。2つ目は辞めるときは惜しまれて辞めると、この2つだけは俺は実行すること、で、広島へ向かったんです(笑)。

そうしたら当時の広島は、やくざのすごいときで、ピストル事件が多発し、僕ら、任官して1〜2年ぐら

墓場まで持っていく戦争の傷跡

● 鈴木 俊光

いで、ピストル殺人事件の犯人をあてがわれました。

その後、広島から呉、鳥取、長野、東京と来て、東京には、東京地検では刑事部3年半、公安部に3年ちよっと、交通部に1年半ぐらいいいて、それから札幌地検の刑事部長へ出て、あとは判子押しですけど。札幌から東京地検の公判部に帰ってきて4年ぐらいいいて、副部長になって、浦和の総務部長、新潟の次席、札幌高検の公安部長、広島高検の刑事部長を経て退職しました。

僕は東京で生まれ育っていますし、子供も大きくなっています、これ以上家族と離れて生活したくないというのと、俺はやれるだけやったという満足感が出てきたものですから、あっさり辞めてしまいました。もちろん、惜しまれて辞めた、と思っています。

17 平和への提言

平和の尊さというか、今の時代が平和なんだというのをまず自覚することですね。戦争の惨めさと怖さというのは、いろいろ言われたり書かれています。現実には、それ以上に厳しいことがあるので、まず、それを認識しないといけません。そこが難しいですけど、認識した上で、それで平和のよさをよく認識して、あとはその人の実行力というか、自分で平和を維持するように努力していくことじゃないですかね。

18 大空襲から70年近くを経て

僕は学徒動員のとき、工場で左薬指を潰して、今変形したまま残っていますが、これを見るにつけ、戦争のときのことを思い出します。

子供や孫たちが、戦争について聞いてくれることはありませんが、だからそれだけ平和なんですよ、僕から言わせればね。

1 始めに

「平和を語るには、戦争を体験された先輩方のお話をきちんと聞いて、後世に伝えなきゃいけないんじゃないか」を趣旨とする貴部会のこの企画は、もちろん企画として、大変結構なことだと思いますし、また、私個人としても、こういう体験を話させていただくということは大変ありがたいことなので、こういう機会を頂戴したことに感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。どうぞ何なりとお尋ねくださいます。何でもお答えしますので、よろしくお願いいたします。

2 昭和16年旧制中学入学、そして学徒動員

昭和16年は、ちょうど旧制中学へ入ったときです。山梨県の大月という町にあります都留中学という県立中学の1年生に入ったばかりでございました。その年が開戦の年でした。

中学には入りましたが、昔の白線が1本入ったのが、私どもの旧制中学の制帽で誇りでしたが、すぐに早速戦闘帽に変っちゃいました。そのうえ、英語は敵性語だからというので、ほとんどABCをやった程度でした。それから野球はやっぱり敵の謀略に乗ったスポーツだからやるなというようなことでした。

昭和18年の秋になりますか、3年生のときだったんです。昭和18年の暮れでしょうか。金沢文庫、金沢八景というあの辺の横須賀に向かって線路右側に大きな海軍の航空技術廠というのがございまして、これは海軍の飛行機やら、爆弾やらを造っている工場でしたが、そこへ、学徒動員だということで連れていかれました。ちよつと出征兵士を送る日のように、町の人や夜、中学の町から出る列車を見送りに来てくれました。宿舎は湘南富岡といつて、ちよつと金沢文庫の2つくらい手前でした。そこに宿舎がございまして、そこ

へ寝泊まりして、それで2駅ほど歩いて海軍の航空技術廠へ通いました。

仕事の中身は、私はいろいろやっただんですけど、鉄くずの選別。ちよつとあれば、全国から金属を集めるときで、全国から集まったスクラップがいっぱい広場にありまして、それを叩いて、音を聞いて成分を分けて選別するという仕事でした。それから、防空壕を掘ったり、一時は、お前は事務職へ回れということで、帳面付けなんかもさせられましたが、そんなことをやっておりました。

3 空襲による大けが

昭和20年の6月10日、私どもがおりました湘南富岡の宿舎がB-29の爆撃を受けまして、私はちよつと小指の頭ぐらゐの爆弾の破片が右足の大腿部から入りまして、途中で骨を削りながら、膀胱へ行つて止まっております。

病名が大変長うございまして、右大腿部盲管弾片創、盲管弾片創というのは、要するに弾が貫通しないものを盲管というようで、右大腿部盲管弾片創兼恥骨骨折尿道破裂というんですが、えらい長い病名でした。

これが昭和20年6月10日の朝の10時ごろに空襲を受けまして、もちろん宿舎のほかに湘南富岡という、これは直木賞の作家の何か遺跡のある町ですが、その町全体も空襲を受けて、大勢の死傷者が出ました。私は海軍の共済病院に収容されまして、当夜の8時ごろになって、おしっこが出ないのでこれはおかしいというので、レントゲンを撮ったら、弾が入っているじゃないかというので、それでもう夜の9時ごろになって緊急手術をしまして、弾片は摘出いたしました。実はその前に、3月の末に旧制中学が短縮されて、4年生で卒業することになりましたので、もうその昭和20年の3月の時には、旧制中学を卒業しておったのです。そのときに私は中学を卒業した当時、明治大学の子科の試験を受けて、合格しておりました。

従つて、もう昭和20年4月1日からは、明治大学